

年間第 2 4 主日の説教

金 大烈 神父 2009 年 9 月 13 日 (日)

《私はあなたを慕います》

おはようございます。

子供達向けに書かれたきれいな童話を紹介させていただきます。

ある池に美しい黄金の鱗を持った魚がいました。その魚は、初め自分の鱗の色に気付かず、他の魚と同じように普通の生活をしていました。しかし、周りの魚たちの自分を見る目が違う事に気づき、他の魚たちと自分を見比べました。他の魚は自分と比べ、みすぼらしく感じられました。その黄金の鱗を持った魚は自分は特別な魚だと思い始めます。ところで、他の魚たちがあちらこちらから近づいてきて「あなたのきれいな鱗を一つ下さい。」と頼みました。しかし、黄金の魚は自分の鱗は大切な物と感じ始めたので、すぐに「あなたにこの鱗をあげる事は出来ません。」と断りました。

この後この魚は他の魚と会わないように、他の道を通りながら自分だけの生き方を始めます。池の中でお祭りがあっても遠くから見ただけで、毎日他の誰とも会わない日が続きます。しかし、ある日、いつの間にか自分が一人ぼっちになっていたことに気がつきます。黄金の魚はふと『寂しい』という気持ちが思い浮かびました。「なぜこんなに寂しいのか、私の体はこんなに美しくても、見てくれる人がいないことは何も意味がないのではないか」と思い、その寂しさについて悲しくなりました。

そのような気持ちが続いたある日、違う池から一匹の魚が引っ越ししてきました。その魚は黄金の鱗を持った魚を見て心を奪われます。『すごくきれいな魚だ。この魚と友達になりたい』と思い、何も知らないその魚は黄金の鱗を持った魚に近づき「あなたは素晴らしいですね。私と友達になって下さい。」と言います。黄金の鱗を持った魚はとても寂しかったので、すぐに「はい、ありがとうございます。」と大喜びで返事をします。それで、二匹は仲良く生活を始めます。そして、黄金の魚は寂しくない日々を過ごす事が出来ました。そして何日が経ったある日、友達になった魚が黄金の魚にこう言います。「お願いがあります。私にあなたのきれいな鱗を一枚下さい。大切にしまっておきたいです」と。そうすると、黄金の魚は以前とは違い「いいですよ」と言いながら、一枚を取って友達の魚にあげました。

ところで、その二匹の様子を見ていた池の他の魚たちは、あの黄金の魚が最近変わったと感じます。そして、他の魚たちも黄金の鱗を持った魚の所に行き「私にも一枚ください。」と頼みます。すると黄金の魚は快く「いいですよ」と返事しながら、来る魚一匹一匹に自分の黄金の鱗をあげました。黄金の鱗を持った魚は全ての鱗を上げてしまい、普通の色の魚になりました。

その時から、その池はあちこち黄金の光で美しく輝きます。それは黄金の鱗をもらった魚たちからの光でした。これで童話はお終いです。

人間が感じられる孤独は二つの観点から見られます。一つは哲学で言う実存的な孤独、あるいは存在論的な孤独があります。そしてもう一つは人との関わりの中で感じる孤独です。前の方は自分の全人的な成熟の為に必ず必要な孤独であり、後者は他人との関係が上手くないので体験する痛みです。

さあ、説明してみましょうか。

存在論的な孤独感とはどういうものでしょうか？ それは、人間って根本的に寂しい存在であること意味します。独りで来て、独りで去ってしまうのが人間であることを言っているのです。人間は様々な愛を体験しても、結局孤独の中に生き、そして死にます。叫んでも、おしゃべりをして、愛する者と一緒にいても拒めない孤独感が必ず全ての人間にあります。しかしそれを否定的に思っ

ません。その存在論的な孤独感が無かったら、絶対神様に会えないからです。そういう意味で私たちは時々自分だけの時間を持って、徹底的に一人なって、わざわざ孤独の中に入る必要もあるのです。それをいわゆる、個人黙想と言います。人間は元から寂しい存在であることを認めるのが神様との出会いの出発点になるからです。

独りで生きることが出来る人は共にも生きることが出来ます。逆に独りで生きることが出来ない人は共にも生きることが出来ません。という事は、存在論的な孤独は避けるものではなく抱きしめるものであることを忘れないで下さい。

次に、人との関わりという観点から見てみましょう。人によって孤独感の大きさは違います。それは関わりが上手いか下手かによって変わります。関わりが上手な人は関わり自体を大切にします。何の計算もありません。相手と友達、家族となって自分は幸せを感じるという人が関わりの上手な人です。しかし、関わりの手下手な人はいつも人と会わなくてはいけない理由を探します。その理由とか目的に合ったら友になり、合わなかったら友になる事を避けようとしています。そのような人は信仰の生活の中でも、先に手を伸ばすことなく、伸ばそうとしても届きにくくなります。

皆様、私達が死ぬことになった時、死ぬ姿を見てくれる人々が必要です。私の死に泣いてくれる人々が必要です。それが人間です。ある人は人間が大嫌いで、犬のようなペットを人間より大事にしています。まるで、神様の様に大事にして、命を分け世話をします。しかし、そのペットが見送ってくれますか？ ペットを愛するのは望ましいことです。しかし、他のかわわりを拒みながらペットに全てをかけるのは正しくないことです。私の目から見ると本当にかわいそうに思います。なぜ、そのような生き方をしているのか本当にもどかしい心です。

皆様、私たちはキリストによって結ばれた信仰の共同体です。兄弟姉妹そして家族です。その家族、兄弟姉妹の言葉の意味についてわからない人はいないでしょう。わかっている通りに行いましょう。出来るだけ沢山の自分を理解してくれる人を作りましょう。『寂しい』『寂しい』と言わないで、出来るだけ沢山のひとと心の交わりが出来るように取り組みましょう。友になる為には自分から手を伸ばすことです。心を見せ、自分の希望だけじゃなくて自分の傷をも見せる事です。社会の中とか競争の世界では間違えたら責められる仕方がない場合もあります。しかし少なくとも、この共同体の中では敵が存在することがあってはいけません。苦手な人の顔を見たら気分が悪くなるという人はその相手の為祈って下さい。私たちの口は神様を賛美しています。なぜその同じ口で悪口を言う事が出来ますか？皆様、私達は信者です。豊かな生き方を過ごそうとすれば、信仰に相応しい心を持たなくてはなりません。それは、共にすることです。共にすることは私達がこの世で神様に与えられた人生をもっと豊かに生きる事を意味します。これからも自分に与えられた全ての関わりに対して積極的に動こうとする心を持ちましょう。自分からの勇気がなければ、正しい友達は出来ません。

最後に、今日の福音(マルコ8・27-35)とつながりのある答唱詩篇の内容について考えてみました。

《荒地のかわきはてた土のように、神よ、私はあなたをしたう》

《したう(慕う)》とはどういう意味でしょうか？逢いたくて、逢いたくてたまらない気持です。寝ても覚めても忘れられず、痛みも感じる位の事を《慕う》と言います。私達も神様をそのように慕っていると思います、個人的に違いはあると思いますが。

皆様をお願いしたいことは、この言葉をいつも心においていただきたいです。《かわきはてた土のように》で、その土は何を願っているのでしょうか？それは《水》《雨》です。生きるか死ぬかの瀬戸際で真剣に願い待ち望む心です。『あなた方は私を何者だと言うのか。』その質問に私達は自信を持って『私はあなたを慕います。』と言う告白が自然に出来るように。アーメン

ありがとうございました。